

日佛セミナー「仏教とアジア社会」に参加して

奈良康明（駒沢大学教授）



かつて、「夏は暑い」というテーマでどこかに書いたことがある。

暑い時、我々はその暑さにどう対処するのだろうか、ここには二つの方向があつて、まづ、暑さをなくしてしまえ、という考え方がある、暑さがなくなり、あるいは軽減されれば、暑さの苦は「解消」するから、この考え方方は大変に有効である。クーラーを利用するというのはその典型的な例である。

しかし、野原ではクーラーはきかないし、都

会でも停電したら役にはたたない。クーラーは万能でもなく、何時でも使えるわけではない。

そこで二番目に、我々の心を暑さに対抗出来るものとしよう、という方法がでてくる。

では、どうやつて？ と、ここに「夏は暑い」という受け取りかたが意味を持つてくる。

暑さという苦が、現実のものとして、今、私におそいかかっている。クーラーもきかない。あの時こうしていれば、こんなに暑い所を歩くような羽目にはならなかつたろうに、とボヤクのは無意味である。過去は過去で過ぎ去つてしまつたのだから、今更どうしようもない。また、

こういうシステムにすれば、暑いきなかに歩かなくてすむのに、というのは未来への夢である。未来は未来であつて、今の現実ではない。

結局、自分が否応なしに置かれている現状を、嫌なことだらうと何だらうと、はつきりと明らかに自覚し、「夏だもの、暑いのは当たり前」と開

きなおつてしまう。ここに、かえつて、出でくる汗を拭き、拭き、それでも目だけは前を見つめて、胸をはつて歩きつづける内心の強さがでてくる、こうしてこそ、暑さは一時的に「解決」されるのではなく、「解消」される道がひらけれる。

暑さとは人生の暑さのことだが、釈尊の教えた仏教とは、基本的にはこの「解決」の姿勢をもちつづけ、そしてそれができるための不斷の訓練、生きることの訓練、すなわち信仰の生活を心掛けよう、というものだと、私は思つてゐる。

ただ、ここが重要なことだと思うのだが、仏教は自分の心と対面し、心の内部にとじこもるだけではない、私たちはそれぞれの社会に生きていて、そこの歴史的な考え方や慣行、習慣、制度の枠の中にある。私たちは社会的存在なのである。（社会的存在だけ、ではないけれども。）

自分の現実の状況を「あきらかに」「あるがままに」みて、開きなおつて生きる、ということは、必ずや、その人の生きている社会と密接にかかわっている。社会という脈絡の中で、信仰者としてどう生きるのか、ということが何時も問われているし、それなりの社会への発言や働きかけにも連なつてくる。ここに仏教徒が政治や経済、社会の動向、医学や科学の社会的意味などとかかわってくる。

また、上にのべた言葉を使うなら、自分の苦を「解決」する教えと実践を中心に教団が成立すると、ここでも教団と社会との関わりがでてくる。つまり、私たちの社会生活は祖先崇拜や葬式、結婚式等の通過儀礼、また祈願儀礼などの民間信仰的な文化の上に成り立っている。だから仏教教団はどうしてもこうした民間信仰をとりあげ、いろいろな形で仏教化し、自分のものとしないと、教団自体が社会に定着しないの

である。

さて、仏教はインドから東南アジア、中国、韓国、日本などのアジア社会にひろがり、今日まで伝えられてきた。この事実は、上に述べたように、仏教がそれぞれの社会の政治、経済、社会、文化などと密接にかかわってきた形跡を示している。

一一

こんなことを、今更、言い出したのには実はそれなりの理由があるので、今までの仏教研究というのは、「解決」レヴエルの教理、教学の研究のみが主流になつていた。政治、経済などの関連では殆ど論じられることができなかつた。もあるとすれば、歴史学の立場から仏教教団の動きがとりあげられるぐらいで、仏教学とは関係がなかつた。また仏教徒が行つてゐる民間信仰などの伝統的な宗教文化は民族学や民俗学のみで研究され、それも仏教教理との関係は全



く顧みられなかつた。一方、仏教学者の方もこうした問題にはいつきい関心を示すことがなかつた。仏教といふもの、もう少し正確にいうと、仏教文化は「解決」のレヴエルを本義とし、その意味では個人的な心の世界を基本に眺めつゝも、各時代の社会と深く深くかかわつてゐる。それなのに、今までの仏教研究は、人間の身体にたとえていうなら、各部分をバラバラにして、互いに無関係に研究してきたのである。その意味では、今の医学と似てゐるといつても良い。

しかし、それでは困るのであつて、仏教は仏教文化という全体からみて、その上で、各分野がそれなりに位置づけられ、相互の関連の上で理解されるのが本当だらう。こうした反省が私の属する分野でも出でてゐる。医学界でも同様の傾向が強くなつてゐるといふ。やはり、そういう時代なのであらう。

佛教文化は「解説」のレヴエルを本義とし、その意味では個人的な心の世界を基本に眺めつゝも、各時代の社会と深く深くかかわつてゐる。それなのに、今までの仏教研究は、人間の身体にたとえていうなら、各部分をバラバラにして、互いに無関係に研究してきたのである。

その意味で今回のセミナールは画期的なものといつても良い、坪井先生の報告にもあるとおり、出席者の専門領域は様々である。一致しているのは皆、アジアの研究者だと言つことくらいである。その人たちが一堂に会して「仏教とアジア社会」を論じたことは、仏教という文化体系を全般的に、かつ総合的に、研究する新しい動きの先駆けともいうべき試みでもあつたのである。

三、

それだけに、それぞれの発表は私には大変に面白かつた。ヴァンデルメルシュ先生と加藤栄一先生の発表は中国と日本と舞台を異にしながらも、仏教と政治権力の関係を論じ、特に、後者は仏教教団と政治権力が互いに利用しあい、車の両輪のような関係にあつたとする。これは西欧のタテ系列で霸權を争つたのとは対照的な構造である。フランク先生は帝釈天(インドラ)

というインドの神がいかに仏教にはいり、中国、日本の各地でそれぞれに変容しながら、仏教文化の一面として定着してきた歴史を見事に跡づけた。矢沢先生は中国におけるキリスト教と民衆宗教との関わりを論じ、ティリ先生も文化人類学者のMスパイロの所説をも引きながら、タ

イにおいて仏教がどのような形で一般に受け入れられ、社会生活に機能しているかを論じた。

ラファン先生とグエン・テ・アイン先生の発表はそれぞれラオスおよび南ベトナムにおいて、激動する東南アジア諸国において仏教が政治や社会変革の動きとどうかかわっているか、を論じたものである。考えてみれば、フランスはヴェトナムのかつての宗主国で、フランス、ベトナム両系統の方々の研究者も多く、関心の強いことは当然なのだが、日本から行つた私には新鮮な刺激だった。そして、黒田師は善光寺の創設と発展、留学僧派遣事業を中心にながら、

現代に生きる仏教者の活動を生々しい感動でつづった。アジアの、ここでは無論日本の、社会に民衆が仏教に何を求め、仏教者がわがそれにどう対応しているか、は本セミナーの中心テーマで、黒田師の発表は特にフランス側の出席者を喜ばせた。

こうして見てくると、それぞれの発表論文はまことに多岐にわたつていて、扱う国や時代もさることながら、研究の視座も方法もみな違う。これは仏教と社会というテーマから、当然そうなるはずなので、驚くにはあたらない。しかし、上にも述べたように、仏教がさまざまな方面からアプローチされる、ということが共通の意識としてあり、それらが同一の学会で提示され、等しく興味をもつて議論されたところに、本セミナーの一つの大きな意義があると私は思う。各発表それぞれの質の高さもあり、有意義で、成功した学会であった。